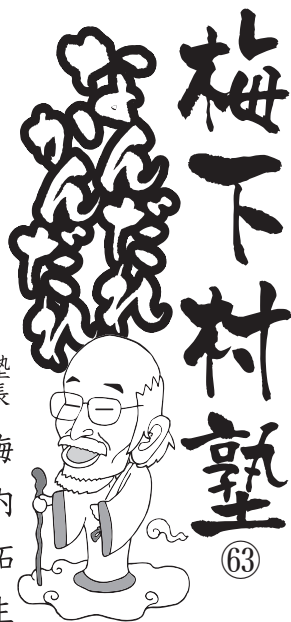


「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



塾長 梅内 拓生

63

(いじめと詩の暗唱)

パソコンの普及に象徴されるように、現代社会は電子通信の時代であり、この便利な通信のため、世界の出来事はオンタイムで知ることが可能になりました。このような便利性は同時に新たな社会問題を孕んでおり、それがいろいろな形と姿で社会に現れてきております。

先日、1月27日(日)に東京都中央区佃中学校で、毎日新聞と日本パソコン能力検定委員会の主催で行われた、毎日パソコン入力コンクールに「いじめとパソコン通信」に関することへのアドバイザーとして招かれ、出席しました。

文部科学省を始め、各県の学校教育関係者

の方々も多く参加しておりました。私は、「いじめとパソコン通信の問題と可能性」に関する取り組みに、特に詩を詠むことへの取り組みに大きな関心を持ちました。

それは昨年の2012年5月に気仙沼市と大船渡市で開催された、「森と水と命の惑星」国際会議で報告された、津波に襲われた釜石市で、身もと不明の遺体を家族が引き取りに来るまで、心を込めて世話した小学校、中学校の同級生の千葉淳氏の行動を思い出したからであります。

この胸を打つ千葉淳氏のごとは、「遺体」という本として出版されており、映画にもなっております。千葉淳氏との会話で、二人がお互いに思い出したことは小学6年生の時に、毎朝教室で山本有三の「心に太陽をもて」と宮沢賢治の「雨にも負けず」の詩を暗唱したことでした。千葉君も私も、それぞれに、いじめを経験しました。二人とも毎朝この詩の暗唱により、自立への自我が自覚めたことを、強く感じていたことを話し合いました。

この胸を打つ千葉淳氏のごとは、「遺体」という本として出版されており、映画にもなっております。千葉淳氏との会話で、二人がお互いに思い出したことは小学6年生の時に、毎朝教室で山本有三の「心に太陽をもて」と宮沢賢治の「雨にも負けず」の詩を暗唱したことでした。千葉君も私も、それぞれに、いじめを経験しました。二人とも毎朝この詩の暗唱により、自立への自我が自覚めたことを、強く感じていたことを話し合いました。

世迷言は1月10日には中国共産党政府の言論統制、1月23日には北京の深刻なスモッグと共産党政府の国民の生活を考えない政治行政の在り方への疑問を報告述べている。第二次世界大戦前後の日本の軍部の治世、米国の占領軍の治世、これら体制での言論統制の記憶は子供なりに覚えております。

江戸時代の俳人である蕪村は梅雨で水かさが増して、洪水の恐れのある大河を詠んでおります。

は困難であります。蕪村と芭蕉の俳句は、これら因縁の世界は、これを眺める立場によって違ったものになることを詠んでいると思います。

(コンピュータと因縁の世界)

五月雨や 大河を前に家二軒

1月24日の世迷言は大きな津波被害にあった、山田町で火事場の泥棒まがいのことをした、NPOのことを述べております。地獄で仏ならぬ悪魔と出合った山田町の人々の心に大きな傷跡を残したと思います。「人を見たら〇〇と思え、これら因縁として、用心をせよと注意を喚起しているものと思えます。

芭蕉は奥の細道紀行で梅雨時の最上川を詠みました。

最新のコンピュータ科学は巡りつつある因縁の世界を捉えようと探求を続けております。いわゆるデジタルとアナログの世界のつながりです。短歌や俳句など日本の「5・7・5」と「7・7」の詠作と手を携えて、「心」として、これらをつなげる手段になると思えます。

自由と統制、無規律と規律、独占と平等、日本にも世界にもいろいろな格言があります。「良葉は口に苦し」、「過ぎたるは及ばざるがごとし」、「帯に短し襷に長し」、「足るを知る」、「早起きは三文の徳」、21世紀はこれから人間が積み重ねてきた、知恵を掘り起こして、再吟味することを目指すべきであり、これらを共有することであると思う。

自然と人間社会は深い因縁で結ばれている、これはお釈迦様の教えです。現代科学は、これを理論で捉えようと努力しております。コンピュータ科学と技術は大きな進展をしております。しかし、自然と人間との深い因縁を捉えきること

は困難であります。蕪村と芭蕉の俳句は、これら因縁の世界は、これを眺める立場によって違ったものになることを詠んでいると思います。